

風を起こす

<第30回>

「若者の元気」↓「まちの元気」にする仕組み

塩尻市企画政策部企画課
シテイプロモーション係

山田 崇さん

人口減少が進むなか、個人の能力向上が求められている。組織においても然り。そのカギを握るのは良きロールモデルがいるか否かではないか。上に立つ人間が良きロールモデルであれば、若い力が組織の力になるに違いない。

シャッター街を拠点に、人と人、人と地域をつなぐ「nanoda」

普通だったら断られると思う。もしくは延期される。新年度早々の取材。しかも、人事異動で3年ぶりに出向先から戻ってきてすぐである。にもかかわらず、こんなにも気持ちよく引き受けてくれるとは。「いつでもどうぞ」——塩尻市企画政策部企画課・山田崇さんの対応の清々しさに、こちらまで気持ちが明るくなった。

いまや講師と呼ばれることも多い山田さん。高校生や大学生にはキャリアデザイン、自治体職員や市民向けには協働のまちづくりなど、引き出しはいくらでもある。そのプレゼン資料の中に、かの経営学者P・F・

ドラッカーによる次の言葉があった。

——あなたは何によって憶えられたいか——

今の山田さんだったらこれだろう。「空き家から始まる商店街の賑わい創出プロジェクト—nanoda代表」。で、具体的にはどういうことか。ホームページの説明をまめるとこうなる。

「2012年4月、大門商店街に空き家を借りてnanodaと名付けた。当初、塩尻市職員有志が月1000円を出し合って維持管理していたが、現在は商店街店主や市職員以外の方も参加し運営中。——を拠点に、人と人、人と地域をつなぐ企画を展開している」
大門商店街は塩尻市のいわゆる中心市街地。街道沿いにあり、かつては大いににぎわ



〔やまだ たかし〕
1975年、長野県塩尻市出身。1998年に千葉大学工学部応用化学科卒業後、塩尻市に入庁。総務部税務課固定資産税係を振り出しに、総務部財政課財産管理係、松本広域連合事務局、市民交流センター開設準備室、同総務課、塩尻商工会議所を経て、2015年4月より現職。nanodaでは「地域に飛び出す公務員アワード2013」（地域に飛び出す公務員を応援する首長連合）も受賞している。

っていたが、今では空き店舗率21・3%のシャッター街となっている。山田さんは「空き店舗のシャッターを一つでも開けたい」と思った。だが、商売したこともなければ、商店街に住んだこともない——「それで商店街の課題がわかるのか。こんなところで議論してもダメだ。まずは空き家を一軒借りてみよう」。

——やってみなきゃわからない——

そこからnanodaが始まった。

nanodaのトップページを飾る、大門商店街をモチーフにしたアート作品。「カッコよくなきゃ人は集まらない」という山田さんのポリシーが反映され、nanodaのアイテムはどれもオシャレ♪



「nanoda」——このネーミングはかなり使い勝手がいい。アルファベットの字面にはオシャレ感がありつつ、日本語として音で聞くと脱力感がただよう。「天才バカボンのパパなのだ」みたいな感じ。拠点の名前であり、イベント名としても使える。ゆるい雰囲気、敷居を低くする。

築60年の空き店舗で、山田さんたちは出勤前の朝、シャッターを開けてみた。すると、商店街の人たちが声をかけてくれた。せっかくだから、週末、朝ごはんを一緒に食べてみた。題して「朝食なのだ」。モーニングをやる店などない商店街で、若者からお年寄り、子連れのお母さんまで参加してくれるように

なった。

人が集えば、情報が集まり、アイデアが生まれる。「いいじゃん、それやってみようよ!」——つてことで、塩尻ワインを飲む習慣をつくる「ワインなのだ」、商店街でカレーを食べ歩く「ぐるぐるカレーなのだ」、全国各地から集まった塩を野菜やおにぎりにつけて味比べする「しおなのだ!」などなど、おもしろそうな企画はどんどん実行してみた。すると、高齢化していた商店街で若者たちの姿が見られるようになった。

商店街の一員として付き合う中でわかったことがある——「空き店舗でも困っていない」。年金と蓄えで暮らしていける家主にしてみれば、無理にシャッターを開ける必要はないのだ。ただ「話す相手がいない」。空き店舗などをお掃除する「お掃除なのだ」では、きれいになった部屋で、参加者たちがお年寄りの話に耳を澄ませた。世代を超えた交流が、街に小さな灯をともした。

nanodaを拠点とした人の輪は市外、県外にも広がった。NPO法人シブヤ大学とのコラボで実現した「人に会いに行く旅」では、首都圏の若者たちと地元の人たちが、地域を超えてつながった。インターンシップ、地域イノベーター留学、山田さんが仕掛けたプロジェクトは、若者たちを引き寄せた。

2013年6月には、2つ目の拠点として「アトリエnanoda」がオープン。美大出身の女性がインターンで移り住み、ワークショップやギャラリーとして活用している。

さらに、nanodaの取り組みに刺激を受け、他の街でも若者たちが動き出している。「空き家を一軒借りてみよう」——山田さんが仲間たちと始めたプロジェクトは、周囲を巻き込みながら活動の場を広げている。

派遣先での経験がターニングポイントに

大学卒業後は設計事務所への就職を希望していた山田さんが塩尻市職員になったのは、父に「採用試験を受けてみる」と言われたからだ。具体的なイメージもないまま配属された税務課固定資産税係で、二つ良いことがあった。

「一つは席の両隣の先輩がすごく良かったことです。一人は仕事を教えてくれて、一人は遊びを教えてくださいました。もう一つは、いろんな新築家屋を見て回れたことです。もともと建築をやりたいから、面白いじゃん」つて仕事に興味が持てました」

次に配属された財政課財産管理係では、引き継いだ前任者に興味をもった。

「仕事ぶりがめちゃくちゃきれいだったんです。書類のまとめ方一つを取ってもすごく丁寧で、その仕事ぶりをもう一度見てみたいと思いました」

前任者が希望して行ったと聞き、山田さんは松本広域連合への派遣を希望した。派遣が決まった時、上司が嬉しいことを言ってくれた——「山田を塩尻市職員の代表で行かせるんだ」。



夜の商店街で
温もりを感じさせる
nanodaの明かり

「その言葉でシャキッとしましたね。茶髪だった髪を、黒く染めて短くしました。それまでは、塩尻市の代表だと思って仕事してなかったですから」

この派遣先での経験が、山田さんのターニングポイントとなった。

松本広域連合は全国初となる広域消防を運営していた。そのせいもあってか、職員には強い自負が感じられた。出勤前の準備では皆、靴をきれいに磨く。靴が汚いことで「この人に任せて大丈夫？」と少しでも市民に不安を与えない。そんな細かいところまで気を遣って仕事をする。それは、先輩から後輩へ連綿と伝えられてきた教えでもあった。

「消防署員は市民の生命、財産を守ることに使命ですが、仕事に対する姿勢がとにかくカッコよかった。自分もしっかり仕事しなければと、気持ち引き締まりました」

当時19市町村から構成されていた松本広域連合では、43万圏域を対象に消防をはじめ医療、ごみ処理などの業務を担っていた。そのような環境下で、山田さんは「塩尻市のことだけを考えて仕事するのは小さい」と感じた。職員研修で講師をお願いした明治大学・牛山久仁彦教授との出会いも、山田さんが働き方を変える大きなきっかけとなった。

—— 地方公共団体は、住民の福祉の増進を

図ることを基本として、地域における

行政を自主的かつ総合的に実施する役

割を広く担うものですね——

「地方自治法第一条第二項に目的条項がプラスされた。これはすごいことなんだと、その意味の大きさを改めて認識しました」

自分たちがよかった、 だけでももったいない

派遣先から戻るにあたり山田さんは法制部門を望んだが、市民交流センター開設準備室へ配属された。それは上司の推薦によるものだった。「山田は新しいことにチャレンジする部門のほうに向いていると思ったからだ」—— 飲み会の席で聞いたその言葉が、めちやくちや嬉しかった。

「えんぱーく」と名付けられた市民交流センターは、図書館を中心に子育て支援・青少年交流、市商工街づくり部門、商工会議所が併設されている。協働のまちづくり、中心市街地活性化、人づくりの拠点として、ハード面だけでなく、ソフト面からも「機能融合」を目指していた。

山田さんは同僚2人とともに、厚生労働省が公募していた補助事業に企画書を提出した。ひとり親家庭の母親たちにITスキルを訓練し、在宅就業の環境を整え、マネジメントしていく。「ひとり親家庭の在宅就業支援事業」の企画は採用され、13課17名による推進チームが立ち上げられた。月2回の会議では福祉、教育、産業振興などさまざまな観点から未来志向の話が展開された。

「メンバーとの対話を通じて、いまの時代

は一つの課題を一つの部署で対応しきれなくなってきたことと、部署を超えて取り組むことの大切さに気づかされました」

2年間の事業が終われば、推進チームは解散される。「もったいないよね」—— 部署を超えて創造的に対話ができた仕組みを生かすことができなにか。それとも一つ、良い経験や良い人脈を共有できないか。

「私は松本広域連合に派遣され、外から塩尻市を見たり、やり方の異なる環境で仕事をしたことでも多くを学びました。ですが、せっかくなので経験や情報をフィードバックする場がなかった」

それは、補助事業の企画書を共に練り上げた、同僚2人も同じだった。彼らもまた、国の機関に派遣されたことで視野が大きく広がった—— 「自分たちがよかった、だけではもったいない」。

市では、団塊世代の退職にともない5年で2割の職員が入れ替わる。公務員人気の高まりを背景に、新規採用職員の中には一流大学出身者も見られるようになった。大学でまちづくりやブランディング、過疎などを専門で学び、高い社会貢献意識をもつて入庁してきても、意欲を失ったり、早々に辞めてしまったのではもったいない。

「いち早く職場に慣れてもらうためにも、部署を超えた交流が必要だと思います」

そこから塩尻市若手職員意見交換会「しおラボ」が生まれた。



若者の心をつかむイベントも数多く実施。
山田さんは彼らにとってよき兄貴的存在!?

自治体職員が変われば、 地域は絶対に変わる

2011年11月、「しおラボ」の第1回目が開催された。ゲストは副市長。と言っても堅苦しいものではなく、リラックスした雰囲気の中で「みんなで集まったら何ができるの」をテーマに自由な対話が行われた。「しおラボ」では「オープンに会話を進めるカフェのような空間でこそ、知識や知恵は

創発される」というワールド・カフェ方式を取り入れ、ゲストにも一参加者として混じってもらおう。

「職員個々の能力とりわけプレゼン能力は大事だよねということ、若手職員にもゲストとしてプレゼンしてもらいます」

「しおラボ」には「グチは言わない」「単なる批判はしない」というルールがある。自主研究会や勉強会を開く自治体職員は少なくないが、単なる批評家になってしまったり、派閥になってしまいうことも往々にしてあるからだ。

「頭でっかちではダメだ。必ず行動に移そうということ、プロミスカードを取り入れています」

プロミスカードとは、自分への約束を皆の前で発表して行動につなげていこうとするもので、高校生を対象にキャリア学習プログラムを実施するNPO法人カタリバが行っている手法だ。「しおラボ」では1人15秒のスピーチで、明日からの行動を宣言する。

2012年に開催された第17回目の「しおラボ」のテーマは「魅力ある商店街を考える」。その時、山田さんがプロミスカードに書いたのが「空き家を一軒借りてみる」だった。

プロミスカードで宣言したのが3月22日で、4月1日に内見、15日には「空き家を一軒借りてみた」。商工会議所へ出向となり多忙な時期であるにもかかわらず、なんと素早い行動だろう。

「しおラボをスタートした時、自分自身が

忘れちゃいけないと、プレゼン資料の最初と最後に入れた言葉があります」

それは山田さんの座右の銘でもある。

—— 見たい時にみる、やりたい時にやる。
できるよにならないうちは、
すぐに遅い——

「自治体職員が変われば、地域は絶対に変わります。自治体職員がいない地域はありませんし、自治体職員は地域の人から期待されています。nanodaを始めてから、そう実感しました」

「手柄は全部、山田くんのもの。失敗したら私のせいになさい」「山田にはフリーハンドを。責任はすべて俺が取る」——そんな心強い上司に恵まれた山田さんは、次は自分が良い上司になる番だと意識している。

「自分自身もプレイヤーとして、挑戦したり失敗した経験を積んでいなければ、若者を応援などできないんだと思います」

山田さんを慕って、庁内外、市内外を問わずたくさんの方が集まってくる。その出会いから、また、新たな展開が広がっていく。「偶然の人間関係の連続」は、山田さんにとってもはや快感の域である。

取材中にかかってきた一本の電話。「さすが」「ナイスです」——ポジティブな言葉で返す山田さんのその対応に、相手のやる気を引き出すヒントを見た気がした。

(取材／ライター 更田沙良)